

幼稚園における参加型音楽会の実践

——5歳児の取り組みから——

溝口 綾子*

* 帝京短期大学 こども教育学科

要 旨

乳幼児の保育では、楽しい音楽体験を取り入れることは重要である。乳幼児の音楽体験の始まりは「聴く」ことである。乳幼児は良い音楽を聴くことを通して感動し、そのことが情操を育むことにつながる。

A幼稚園では、クラシック音楽の生演奏を聴く機会に恵まれた。この音楽会は、聴くだけではなく参加型としたことで子どもたちにとって質の良い音楽を興味深く楽しむことができていた。

聴く音楽の選曲のポイントの一つは、メロディーがリズムカルで躍動感があり楽しい曲であること、二つには、子どもが聴いて歌詞やメロディーにストーリー性があるイメージしやすい曲である。いずれの曲も4拍子あるいは2拍子が多く、中でも子どもの歌の場合では音程幅は5度以内の曲が多い。このように年齢や発達に適した楽曲や音楽要素でプログラミングされた参加型音楽会は、生演奏を聴いて楽しむことを通して音楽環境への子どもの主体的なかかわりを生み出す結果が得られた。

子どもに聴かせたい音楽は数多くあるが、選曲においては保育者の保育観や音楽性、感性が大きくかかわってくる。

キーワード：幼児、生演奏、聴くこと

I はじめに

乳幼児の保育において「聴く」「歌う」「踊る」「楽器を鳴らす」などの楽しい音楽体験を取り入れることは重要である。子どもの聴力は、胎児期の20週～23週前後で聴覚機能が発達し、胎内で母体の血流の音を聴いているといわれている。さらに、28～31週では聴覚が完成するため、外からの強い音に反応し、高音や低音も聴こえることが明らかになっている¹⁾。また、鈴木らは胎内で母親の心拍音、血流音、母親の声、外界の環境音への知覚経験をもつことにより情緒の安定を得て成長するという²⁾。これらのことから出生前から聴くことが始まっているといえる。熊谷³⁾は、乳幼児期における脳などの神経組織の発達は著しく、そのような時期に質の良い優れた音楽に出会うことは豊かな感情経験を積み、感受性の発達を促進させ音楽性を培う。また、美しい音楽との出会いにより音楽を愛する心情が養われ、歌ってみたい、楽器を鳴らしてみたい、という意欲につながり音楽的なレディネスの形成になるという³⁾。このように乳幼児の「歌う」「踊る」「楽器を鳴らす」などの音楽体験の始まりは「聴く」ことが基盤となり豊かな感受性や音楽性を育てていくと考えられる。すなわち、乳幼児は良い音楽を聴くことを通して感動し、それが情操を育むこ

とにつながると考える。乳幼児にとって質の良い音楽とは、一般的には美しい優しいメロディー、快いリズムで構成され、それらに感動し心揺さぶられる音楽といえよう。したがって、幼稚園や保育園の保育現場において保育者は、美しい質の良い音楽を与える環境（場）を作ることが大切である。例えば、登園時に子どもたちを向かい入れる曲であったり、新しい歌を覚えるときに聴くCDであったり、昼食時に流すBGMであったりする。音楽のジャンルは、クラシック、ジャズ、ポピュラー、民謡など様々ある。保育の中で「聴く音楽」を選択する場合は、音階、旋律、音程、リズム、テンポなどの音楽要素のほか、演奏形態（楽器、声楽）など年齢や発達にあったものに配慮する必要がある。子どもたちが集まって「音楽を聴く」ことは、楽曲の持っている魅力に心揺さぶられ引き込まれることが多いとはいえ、音楽に耳を傾けるということは、日常保育において集合時に保育者や友だちの話や聞き姿勢が育まれていることが基盤になるといえよう。これについて幼稚園教育要領（29年度告示）の第1章、総則には幼稚園教育において育みたい資質、能力及び幼児期の終わりまでに育てたい姿として「言葉による伝えあい」を具体的な姿の一つに示している。すなわち、相手の話を注意して聞いたり言葉による伝えあいを楽しむようになることを明確化している⁴⁾。

本研究は、幼稚園において、本幼稚園の保護者でもあるクラシック音楽の演奏家と5歳児の交わる音楽会の実践を分析、考察するものである。

II 研究の目的と方法

クラシックの生演奏を聴くという機会は、各家庭においてはあっても幼稚園という集団の場では少ない。都内私立A幼稚園では毎年2月頃、5歳児のみ登園してお別れ会を行うが年度によってその内容はさまざまである。本幼稚園では今年度はクラシックの演奏家である保護者が生演奏の音楽会を提案してきた。幼稚園側では生の音楽を聴く良い機会と捉え、この音楽体験を通してさらに豊かな情操を育むことにつながるのではないかと考える。

対象は5歳児2学級50名とし、担任2名を中心に演奏家（オーボエ1名、ファゴット1名、サクソ1名 声楽1名）と、どのような内容で音楽会を設定したらよいのかを話し合い、幼児にとって聴くのみ音楽会ではなくより楽しめるような参加型音楽会のプログラムを企画する。内容としては、演奏家みの曲、幼稚園の教員の参加する曲、子どもたちも参加する曲を組み入れる。その中で、演奏形態はどのように行われたか、楽曲はどのような音楽要素をなしているかについて実践を分析し、年齢や発達にあった音楽を提供しているかを考察する。また、5歳児が生音楽を聴くという体験からどのような様態が捉えられるか、参加の状況や反応をビデオや教員への聞き取り調査、質問紙調査から考察する。このことから保育の場において生演奏の音楽会の実践に必要なことは何か、また、

表1. 演奏楽器の解説

楽 器 名	紹介と解説
オーボエ (描画1)	木管楽器の一種であり、ダブルリード ^{注1)} で発音する円錐形の楽器である。フランス語で「高音の木管楽器」とされている。オーケストラの中でも哀愁を帯びた拡張ある音色として尊重されている。
ファゴット (描画2)	木管楽器の一つでオーボエと同様に上下に組み合わせられた2枚のリードによって音を出すダブルリード式の木管楽器である。低音域でも立ち上がりが高く、歯切れのよい持続音を出すことができる。
サクソ (描画3)	サクソフォーンまたはサクソフォンは金属製の木管楽器の一種である。木管楽器と金管楽器の両方の要素を備えている。豊富な音色と多彩な表現力は従来の楽器にはない。サクソと略称で呼ばれることが多い。
ラチェット (写真1)	体鳴楽器の一つ。打楽器奏者が演奏する。歯車と薄い木片などの舌から成る。材質は木製で回転する凹凸に発音板が連続的にぶつかることで音が鳴る。
カホン (写真2)	ペルー発祥の打楽器の一種。ペルー式と呼ばれる箱型のものからキューバ式と呼ばれるコンガのように股に挟んで演奏されるものまである。打面が木製である打楽器全般を指す。カホンはスペイン語で箱を意味し、その名の通り中が空洞で直方体の形状をしている。通常、側面に一つだけ打面をもち、その反対側にサウンドホールが空けられている。

5歳児にとって参加型音楽会はどのような影響となって受け止められているかを考察し、保育における参加型音楽会についてその意義と方法を明らかにすることを目的とする。なお、写真及びビデオ撮影、演奏再生を研究に使用することは保護者、教員の同意を得ている。

Ⅲ 結果と考察

1. 音楽会プログラムの分析と考察

A幼稚園では、日常保育でクラシック音楽を聴くことはあっても生の演奏を聴くことは初めてである。音楽を聴かせる場合、Iの項で述べているようにBGMのように環境音楽として聴かせる場合と、新しい歌の導入や劇遊びやオペレッタの挿入として保育者が意識的に聴かせる場合などがある²⁾。本稿では後者の場合を取り上げている。

プログラムの選曲や演奏形態から、子どもたちにとって生の楽器演奏を聴くという初めての音楽体験を通して聴こえてくる音楽に感動し親しみを持てるようなプログラミングの工夫が読み取れる。

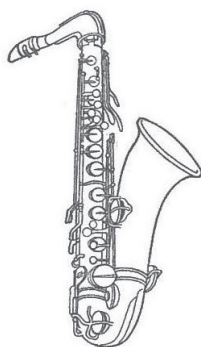
プログラム<表2>の最初の①楽器紹介では、子どもたちに馴染みのない演奏楽器についてオーボエ、ファゴット、サックスの順に楽器ケースから出し組み立てるところから見せる。さらに各楽器は、その楽器の特徴を表す曲の1フレーズを奏でる方法で始まっている。例えば、オーボエは「きらきら星」、ファゴットは「どらえもん」、サックスは「星に願いを」である。演奏に使われた楽器の紹介と解説は以下<表1>に示す通りである⁵⁾。



描画1



描画2



描画3



写真1

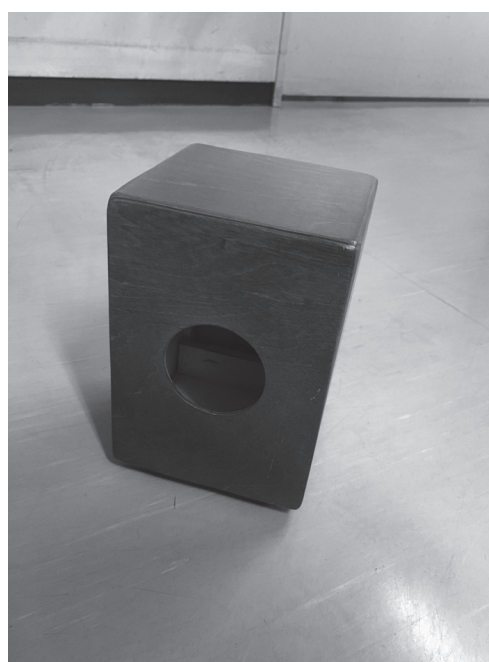


写真2

5歳児の参加による音楽会のプログラムは<表2>のようになる。音楽会が始まるとすぐに子どもたちは初めて見る楽器の形、音色の違いや音量に驚いて感嘆の声を挙げている。以下のプログラムに従い楽曲名、作曲者、演奏楽器、音楽要素、子どもの状態を分析、考察する^{2, 5)}。

表2. 音楽会プログラム

	楽曲名 作曲者名	拍子	演奏楽器
①	楽器紹介		
②	交響曲第9番「歓びの歌」 L・B・ベートーヴェン	4/4	歌、オーボエ、サクソ、ファゴット、ピアノ
③	おもちゃの交響曲 J・ハイドン	4/4	小太鼓、シンバル、カスタネット、すず、水笛、 トライアングル、リコーダー、ラチェット
④	ラデツキー行進曲 J・シュトラウス	2/4	オーボエ、サクソ、ファゴット、ピアノ(連弾) こども・すず、タンバリン、カスタネット
⑤	うたえ ばんばん 山本直純	4/4	オーボエ、サクソ、ファゴット、ピアノ
⑥	ポーレチケ シゲチンスキー	3/4	歌、ピアノ、オーボエ、サクソ、ファゴット
⑦	こどもの世界 R・M・シャーマン R・B・シャーマン	2/4	歌、ファゴット、オーボエ、サクソ、ピアノ
⑧	(アンコール) さんぽ 久石 譲	4/4	歌、ピアノ、サクソ、オーボエ、カホン

- ② 「歓びの歌」は、ドイツの作曲家ベートーヴェン（1770～1827）の作曲で交響曲第九番二短調第4楽章合唱の一部分の演奏である。この第九交響曲を作曲した当時、作曲者はすでに耳は聞こえない状態であったとされている。今回は3つの管楽器とピアノに加え、ソプラノの声楽の演奏である。この「歓びの歌」は4分の4拍子で四分音符を中心としたリズム構成となっているため、子どもにとってリズムをとりやすい。さらに子どもたちは保育の中で幼児用に編曲された「歓びの歌」をうたっているため、「知っている曲」として体でリズムをとりながら聴いている。繰り返しの演奏でメロディーを口ずさんでいる子どももいる。
- ③ 「おもちゃの交響曲」はオーストリアの作曲家ハイドン（1732～1809）の曲で「TOY, SYMPHONY」と呼ばれている。現在では、この交響曲の作曲者はハイドンではなくモーツァルトであるという説もある。この曲は4分の4拍子ハ長調の音階で明るいメロディーで軽やかなリズムであることや教員が打楽器（シンバル、鈴、小太鼓、カスタネット、リコーダー、水笛）で参加していることに加え、これらの楽器のほか初めて

見るラチェット^{写真1}の音に興味を示している姿がみられる。

- ④ 「ラデツキー行進曲」は、オーストリアの作曲家ヨハン・シュトラウスI世（1804～1849）の曲である。Radetzky-marchとしてよく知られている行進曲で、クラシック音楽全体でも有数の人気曲である。子どもたちは運動会や体育祭などでよく耳にしていることと、4分の2拍子で主フレーズの4小節が繰り返されリズムに乗りやすい。後半は子どもたちも打楽器（カスタネット、タンバリン、すず）で参加して楽しさを増長させている。このカスタネットの打ち方は楽器演奏していない声楽家の合図に従って最初の4小節は強く（ff）打ち、次の4小節は弱く（pp）打つという曲想を受け止めて演奏できている。
- ⑤ 「うたえばんばん」は、山本直純（1932～2002）の作曲である。元は1970年1月NHKの正月番組のテーマソングとして歌われ、現在は合唱曲として広く親しまれている。4拍子、リズムカルで躍動感があること、音程幅はおおむね5度以内であること、日常保育でもよく歌っていること、3つの管楽器に加えピアノの連弾で担任2名

が参加していることなどで、一層親しみをもって楽しんでる姿がみられる。

⑦ 「ポーレチケ」は、ポーランドの作曲家シゲチンスキー（1896～1955）の作曲といわれている。この「ポーレチケ」はポーランド民謡（ポルカ・トランプランカ）を原曲とし、シゲチンスキーが採譜し、編曲したといわれている。これは、子どもたちの大好きな踊りの曲であり、日ごろはCDを聴きながら踊っている。今回のように3つの管楽器のみの演奏が返って躍動感を生み、さらに4分の3拍子のワルツなので曲が流れると同時に子どもたちは立ち上がり体を揺り動かしている。演奏家の「みんなで踊りましょう」と声がかかると、歓声を挙げながら素早く2人組になり曲に合わせて踊ることを楽しんでいる。

⑧ 「子どもの世界」はアメリカのシャーマン兄弟（1917～1979）の作曲である。「小さな世界（It's a small world）」が原題で世界各地のディズニーパークにあるアトラクションのテーマソングである。一部分臨時記号や歌いだしの個所に6～7度の音程幅や4拍子八分音符の弱起（Auftakt）^{注2）}で始まるが、リズムに乗りやすいメロディーラインの曲である。日常保育では教員のピアノ伴奏で歌っている曲で馴染みもある。今回は管楽器の伴奏に加えて手作りの紙芝居形式になっている世界の子どもの絵とともにその国の代表的な歌を挿入している。例えば、日本の子どもの絵の場面では日本の代表的な歌である“さくらさくら”のメロディーを挿入するというバリエーション演奏を聴いていつもとは異なるイメージをもってうたっている様子がみられる。

⑨ 久石譲（1950～現在）作曲の「さんぽ」はスタジオジブリ制作のアニメ映画「となりのトトロ」のオープニングテーマとして作られた歌である。子どもたちも大好きな歌の一つであり日本の保育現場においてはよく知られている歌でもある。4拍子の歌で一部分には音程幅が8度（1オクターブ）や6度の跳躍音程や臨時記号もあるが、言葉の抑揚と結びついたメロディーラインの曲なので、子どもたちは抵抗なく歌うことができている。また、日常では聞きなれたピアノの伴奏で歌っているが、本日はそれに加えてカホン^{写真2）}という珍しい打楽器に興味を示しながら歌を楽しんでいる様子である。

この音楽会プログラムは、演奏家である保護者が幼稚園から戻って来たわが子の歌ったり踊ったりしている姿に接し、幼稚園の日常の音楽環境の実際を思い描いて今、子どもたちの親しんでいる歌や踊りはどのよ

うな曲かを把握した上で意図的に選曲し盛り込んでいることがわかる。それは「子どもの歌」や好んで聴いている楽曲の多くが4分の4拍子あるいは4分の2拍子であるのは子どもにとってメロディーをとらえやすいことと、乳幼児の声域は通常、二音（レ）からイ音（ラ）が自然発声域であることを踏まえてプログラミングしていることから明白である。このような楽曲は実際の演奏を聴くと、美しい優しいメロディー、快いリズムで構成されていて、子どもの心を弾ませ気持ちを高揚させるような感動を覚える音楽である。

この参加型音楽会の実践によって、5歳児の“楽しかった”“面白かった”という感動体験が子ども自身の内面の成長につながっていく^{6）}。そしてそのことが子どもを内発的に動機づけ、子ども自身の学びとなり新たな興味や関心となって次の活動への動機づけとなると考えられる。このような場合、保育者は子どもたち一人ひとりがどのようなところが“楽しかった”感動体験なのかを捉える必要がある。今回の場合でいえば、直後の教員への聞き取り調査や質問紙調査からも、本幼稚園の保育者は子どもたちが本物の楽器とその生の音、他の楽器と重ね合った音に魅了されている姿と読み取っていることである。そして、その体験からどのような興味や関心が子どもの中に生じてきたかを推測し、子どもたちの心の中に「自分たちも楽器を鳴らしたい」、「友だちや先生と一緒に音楽会をしたい」という気持ちが芽生えたのではないかと推察していることである。

これらのことから保育者はこのような実践の過程を含めた実態を把握し共感する姿勢と、子どもたちが自発的にかかわることのできる音楽環境を計画的に構成していくことが大切と考える。言い換えるならば、5歳児のこの時期（年長組2月頃）は、自分の感じたことや感動したことなど、自分の生活体験に基づく実感を大切に^{6）}。保育者はこのような発達を踏まえて、その体験から子どもは何に感動し何を学んだのかをよみとり、その感動や学びを深めたり発展させたりできるような音楽的環境を整備し、子ども自身の生活体験を基盤とした具体的な音楽に興味関心を持てるよう援助することが大切である。

2. 参加の状況と子どもの様態

会場は、本幼稚園の多目的ホールで、舞台から見て前列から4列目まで子どもたちが座り、その左右に幼稚園教員、子どもの後ろに大学教員が座る。ビデオは最後列の定位置に設定する。

筆者の観察記録と音楽会終了後にビデオ再生した子どもの生の姿や声から様態を把握する。また、参加した幼稚園教員と大学教員への聞き取り調査や質問紙調

査の結果と合わせて分析、考察する。

その結果をまとめたものが<表3>である。

この<表3>について、次のように考察する。

演奏についてどのような感想を持ったかの問いには、「プロの演奏家の楽器（オーボエ、ファゴット、サクソ）の生演奏の迫力と専門家のテクニックに感動した」との回答が7割である。本幼稚園教員や大学教員の中には、音楽鑑賞や、ピアノの他にフルートやトランペットなど楽器演奏に造詣の深い者もいる。教員のほとんどはよい感性と音楽観を有しているといえそうである。

子どもたちの聴く態度や演奏への参加の仕方については、「初めて間近かで見る珍しい楽器の音色や音量に驚き引き込まれていた」という回答が9割弱である。ビデオには子どもたちの緊張感を持ちながらも目を輝かせながら音楽に引き込まれている様子が見取れる。教員は、子どもの中に大きな感動を呼び起こし

ているという状態と捉え、生の音楽の有効性を実感している。

「年長児とはいえ長い時間（40分）集中していたこと」や、「聴くのみでなく曲によっては楽器を鳴らしたり踊ったり子ども主体の構成で楽しめた」という回答が7割前後あり、まさにこれは日々の子どもの実態をよみとり、5歳児の今の時期^{注3)}に必要な経験は何かを把握している保育実践者としての回答である。すなわち、今回の音楽会のような意識的に「聴く音楽」の機会を設定することで得る学びは大きいと確信しているといえよう。

参加型音楽会の取り組みについては、「幼児期に本物の生の音に触れる機会を持つことはその後の音楽体験に良い影響を与える」また、「クラシックの音楽会は幼児期の子どもには無理かと思っていたが、構成の仕方によっては可能である」という5割強の回答から、生の音を媒介とした音楽体験が豊かな情操を育む

表3. 参加型音楽会の様態

項目	教員の感想と意見	人数（割合）
生演奏 (楽器・曲目)	・プロの演奏家の楽器（オーボエ、ファゴット、サクソ）の生演奏は迫力と専門家のテクニックに感動した	14人（70%）
	・子どもにとって親しみやすい（知っている）曲や歌だったので、楽しむことができた	8人（48%）
	・曲の選択は、幼稚園で日常歌ったり踊ったりしている曲（第九～歓びの歌、ポーレチケ、うたえばんばん、子どもの世界）と演奏家の提案した曲（おもちゃのシンフォニー、ラデッキー行進曲）の構成がよかった	6人（36%）
	・プロの演奏家と幼稚園の教員や子どもたちも一緒に演奏できるようなアレンジが素晴らしかった	6人（36%）
	・曲数や曲の長さも5歳児が集中して聴く内容として適していた	4人（24%）
子どもの状態	・初めて間近かで見る珍しい楽器や音色、音量に驚いて引き込まれていた	15人（88%）
	・長い時間（40分）集中して参加していた	13人（77%）
	・聴くのみでなく曲によっては楽器を鳴らしたり踊ったりという子ども主体の構成だったので楽しめた	10人（60%）
	・楽器の説明がわかりやすく、聴くところと参加するところとメリハリがあり取り組みやすかった	9人（53%）
	・親しみやすい曲だったので、手拍子したり口ずさんだりする子どもが多くみられた	6人（36%）
	・今日の音楽会が楽しかったようで、終わった直後から友だちを集めて楽器遊びをしている	4人（24%）
音楽会の状況	・幼児期に本物の音や楽器に接する機会を持つことは、以後の音楽体験に良い影響を与えると思う	9人（53%）
	・クラシックの音楽会は幼児期の子どもには無理かと思っていたが、構成の仕方により可能であることが分かった	9人（53%）
	・日常保育で音楽表現の機会を大切に取入れてきたことが本日の音楽会の成功につながった	6人（36%）
	・今回は、保護者の中の演奏家の提案がきっかけでこの音楽会が実現してよかった	4人（24%）

回答数（18人）複数回答可

ことになる実感していることがうかがえる。

今回の生演奏による音楽会は、プロの演奏家の方々が通常のクラシックの演奏会ではなく、幼児期の子どもたちにクラシック音楽を楽しんでもらうためには、日常、子どもたちがどのような音楽を好み、どのような音楽環境の中で過ごしているかを把握しての企画で実現したと考える。すなわち、その内容がA幼稚園の日常保育から突出したものにならないようにしていることが大きい。たとえば、「飲びの歌」「うたえばんぼん」「こどもの世界」「さんぽ」は歌うことで参加している。また、「ラデッキー行進曲」は楽器で参加し、「ポーレチケ」はダンスで参加している。何よりも子どもが共通のイメージを持ちながら喜んで参加しているということは、この時期（年長組2月頃）の5歳児の年齢や発達に適したものであったといえる。一般的に5歳児は3歳児ころに比べると心身の発達は緩やかになってくるが、音楽環境の中ではこれまで以上に自分の周りの音楽に興味を抱き、集中して聴くようになる。このことは前述している今回の子どもの様態把握の調査で明らかとなった。また、クラシック音楽を聴くという参加型音楽会では、今回プログラミングされた楽曲に代表されるように質のよい音楽、子どもがすぐに反応し楽しめる音楽を選択することの重要性を示唆している。

IV まとめ

近年、テレビ、CD、スマートフォンなどの音楽メディアの発達により、日常保育にもクラシック音楽のほかジャズ、ポップス、歌謡曲、演歌、動画挿入曲、など様々なジャンルの音楽が入り込み、保育者も子どもたちもそれらを抵抗なく受け入れ馴染んでいる。これらの中から保育者は子どもたちが喜ぶであろう質の良い音楽を選曲して楽しい音楽環境を構成することが大切である。

今回の音楽会の選曲のポイントは、大きくは二つである。一つには、「おもちゃの交響曲（ハイドン）」、「ポーレチケ（シゲチンスキー）」、「ラデッキー行進曲（シュトラウスⅠ世）」などのようにメロディーがリズムカルで躍動感があり楽しい曲であることが挙げられる。このほかには、「四季“春”（ヴィバルディー）」、「シンコペイテット・クロック（アンダソン）」などが「聴かせたい音楽」である。これらの楽曲の多くは器楽曲としてクラシック音楽が対象となっていて、古典派やバロック音楽が多い。

二つには、「さんぽ（久石譲）」、「子どもの世界（チャーマン）」のような子どもが聴いて歌詞やメ

ロディーにストーリー性があるイメージしやすい曲である。このほかには、「とんでったバナナ（桜井順）」や「南の島のハメハメハ大王（森田公一）」など、日本人であれば誰もが知っていて広く愛されているものが多い。

このような歌の場合は音程幅が5度以内であることが多いため、メロディーを捉えやすい。また、4拍子あるいは2拍子が多く、3拍子のワルツ（ポーレチケ）はリズムに乗りやすいなど、5歳児にとって楽しめる音楽会となっていることがわかる。

今回の音楽会プログラムでは組み入れられていないが、本稿では三つ目の選曲のポイントとして日常保育で聴かせたい音楽を挙げたい。それは静かな落ち着いた雰囲気を出し出し優しいメロディーの音楽である。例として、「アヴェ・ヴェルム・コルプス（モーツアルト）」、「アヴェ・マリア（モーツアルト）」、「たきび（渡辺茂）」、「まっかな秋（小林秀雄）」などが挙げられる。これらの「聴かせたい音楽」は、胎児期から聴いている母親の声のように心地よい響きの特徴であるため、遊びの節目や活動の導入、昼食、おやつ、午睡など、主に3歳児以下の乳幼児に聴かせたい音楽である^{1,2)}。

このほかにも子どもに聴かせたい音楽は数多くあるが、選曲においては保育者の保育観や音楽観、感性が大きくかかわってくることを念頭に入れる必要がある。つまり、日常保育において多くの保育者は一人ひとりの幼児理解の基に活動場面に応じた環境を構成する際に、充実した遊びとなるよう保育者自身も子どもと一緒に楽しむという援助を自然体で行っている。これは保育者自身の経験知や感性が大きくかかわっている⁷⁾。このことと同様に保育者自身がその音楽を如何に好きで楽しんでいるかが子どもに大きな影響を与えると見える。すなわち、日常的に良い音楽に親しむことで保育者自身の音楽性や感性を磨き、そのことがやがては保育の質を高めることにつながっていくと考えられる。3の(1)でも述べているように、日常保育で子どもに音楽を聴かせる場合の2つ目として挙げている保育者が意識的に聴かせる場合、園によっては片付けや集まりなど一斉に行動を促す際の合図の役割を持たせている場面がしばしばみられる²⁾。こうした場合には子どもにとってその音楽は条件反射のようにいつもの音楽が鳴ったから動くという習慣化がみられ、そこには流されている音楽に対する感動はないと推察する。保育者は子どもに何を体験してほしいかを明確化し、時間や場面に応じて音楽の使い方、あるいは音楽以外の他の道具を用いたり言葉をかけたりなどの方法にも配慮していくことが求められる。

幼稚園教育要領（平成29年告示）の領域「表現」

の「3. 内容の取り扱い」では「豊かな感性は、身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気づくようにすること」⁴⁾と示されている。豊かな感性は、音楽のみでなく日常的に培われる場面が多々ある。すなわち、子どもは自分の周囲の環境とかかわりながらそこに不思議さや面白さを発見し、美しさや優しさを感じ、心を動かしていく。こうした経験を重ねることによって感性や表現力、創造性を豊かにしていくであろう。

今回の参加型音楽会は、保育者が「音楽を聴かせる」ことを意図したものではあるが、大人がただ与えるだけではなく日常保育における「聴く」「歌う」「踊る」「楽器を鳴らす」際の音楽が、4拍子あるいは2拍子で子どもの中に容易に入るメロディーと軽快なリズムで構成された音楽であること、年齢や発達に適した楽曲や音楽要素でプログラミングされていること、さらに生演奏の音楽を聴いて楽しむことを通して子どもの主体性を引き出すことの重要性が明らかになった。

3の(1)で述べているように、参加型音楽会の感動体験が子どもを内発的に動機付けられた結果として本幼稚園の5歳児学級では、この音楽会の後も楽器遊びや音楽会ごっこが連日繰り返されている。それほど先の音楽会が子どもたちにとって印象に残り楽しいものであったからであろう。

今回のように非日常的な活動を保育の中に取り込む場合は、子どもの興味が昨日から今日、今日から明日へと連続的であることを基本とした保育に配慮していくことが大切である⁸⁾。また、幼児教育において音楽表現は技術的、訓練的な指導ではないことは明白である。保育者は、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて日常保育の中で子どもらしい様々な表現ができるようにすることが大切である⁹⁾。保育者は、今回の参加型音楽会のように子どもが様々な音に気づき、感動し、音楽に親しむという直接的な体験を通して表現しようとする意欲や態度を培ったり、「聴かせたい音楽」を耳にして喜びを感じたりできるように、幼稚園生活の中で子どもたちとともに“音楽する”喜びを味わう姿勢で保育に臨むことが求められる。

注1) リード(reed)：木管楽器の発生部分となっている木片のこと。マウスピースに装着され、唇に挟んで息を吹き込むことによって振動させ、発音する。1枚のリードを持つ木管楽器をシン

グルリード(クラリネット、サクソなど)、2枚のリードを持つものをダブルリード(ファゴット、オーボエなど)という。

注2) 弱起(Auftakt)：1拍目以外の拍から始まる音楽または楽曲。何拍子の音楽であっても、基本的に1拍目を強拍と考え、それ以外の拍を弱拍と考えることから、1拍目以外(半拍でも)から始まることを弱拍から起きる音楽という意味で捉えたものである。

上記、注1)、注2)の出典：実用音楽事典～株式会社ドレミ楽譜出版社(2004年)

注3) A幼稚園教育課程 5歳児Ⅲ期(1月～3月)発達の過程：「様々な遊びや活動の中で、友だちとイメージを共有しながら遊び、やり方や約束ごとを決めたり協力し合って自分たちで決めていく時期」～A幼稚園教育課程(2017年)

描画1・2・3の出典：目黒三策編「標準音楽事典」音楽之友社(1970年)

写真1・2は筆者撮影

文献

- 1) 溝口綾子 胎児と環境 角川学芸出版(2004年)
- 2) 鈴木みゆき・藪中征代(編) 乳幼児の音楽 音楽之友社(2005年)
- 3) 熊谷新次郎 第3章子どもの音楽との出会い 桶谷弘美・吉良武志・熊谷新次郎・斎藤正義・杉江正美・高橋悦枝(編) 音楽表現の理論と実際 音楽之友社(2010年)
- 4) 文部科学省 幼稚園教育要領 フレーベル館(2017年)
- 5) 岩田安実・澤田真一・谷川史郎・新里真澄・林信介・森重行敏・森重恭典・門内良彦・山崎潤一郎・山田栄(編) 実用音楽事典 株式会社ドレミ楽譜出版社(2004年)
- 6) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館(2008年)
- 7) 溝口綾子 新任保育者の保育実践における課題意識と省察に関する研究 日本教材学会(2009年)
- 8) 東京学芸大学教師研究会(編) 実践的教師入門 東洋館出版(2000年)
- 9) 相澤保正・伊藤嘉子・木村博子・児玉裕子・澤田直子・田中常雄・松原靖子・吉野幸男(編) あたらしい音楽表現 音楽之友社(2008年)

謝辞

本研究においてご協力いただきましたA幼稚園の演

奏家の保護者の皆様、5歳児と先生方、B大学の先生方に心より感謝申し上げます。

付記

本稿は、日本教材学会第28回大会で発表した内容を加筆、修正したものである。

Practice of Participatory Music Concert in Kindergarten: From the Efforts of 5 year-old

Ayako MIZOGUCHI *

* Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

Abstract

In early childhood childcare, it is important to incorporate an enjoyable music experience. The beginning of the music of on infant is to “listen”. Infant are impressed through listening to good music, which leads to the development of emotions. At kindergarten, I had the opportunity to listen to live music of classical music. Not only listening to this concert but also participating it makes it interesting for children to enjoy good music. One of the points of selection of music to listen to is that the melody is rhythmical, has a feeling of dynamism and is a pleasant song. In two it is a song that the child listens and the lyrics and melody have stories and it is easy to image. Both songs have four or two rhythms and pitch range within 5 degrees. In this way, it is programmed with music elements suitable for age and development, and shows the significance of bringing out the subjectivity of children through listening to and enjoying live music. There are many music that you want children to listen to, but in the music selection. Childcare’s nursery care , musicality, and sensitivity are heavily involved.

Keywords : An infant, Live performance, Listening